

なのはな通信

第25号 2015.2



編集・発行

勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 山田 かおる



「いのちに対する深い学び」の1年間 校長 窪倉 みさ江



4月、期待と不安をもちつつ本校に着任いたしました。江戸川の土手一面に広がる鮮やかな黄色の菜の花に心打たれ、またやさしく迎えてくれたような想いがし、看護師として働き40年を過ごしてきた営みの中で獲得してきた看護への確信、それらを託すべき後継者の育成に非力ながら全力を尽くそうと決意を新たにしました。

入学式の日、緊張しながらも明日からの学びに向かう初々しい新入生を前に、先輩学生から「この学校にはいのちに対する深い学びがあります。一緒に成長していきましょう」という力強いメッセージがあり胸を突かれました。

1年生は交流研修や基礎実習で「人間をありのままにとらえる」ことの難しさや基本的な看護技術をしっかりと身に着けることの大切さを学びました。『事実をありのままに見る難しさを痛感し、どうしたら患者さんの闘病意欲を引き出す事が出来るのか、患者さんとのコミュニケーションをとるのが難しく途方に暮れてしまった。』『患者さんがこれほど喜んでくれるとは思わずとても驚き、看護技術のもたらす効果を実感した。実施して本当によかったです。』また「育

ち合う」こと。集団の中で支えあい個人もまた成長することの確かさを掴み始めています。

2年生は生命活動を学び病態を科学的にとらえることを主眼に置き学びを深めました。成人実習や「地域社会の実態を、フィールドワークをとおして学び、国民の命・健康・生活・労働を護る医療・看護の役割を学ぶ」ことを目的に行う地域フィールドなどを通し病気、命、人として生きることなど考え悩みながらも日々たくましく成長しています。

3年生、いよいよ卒業です。ハンセン病療養所「栗生楽泉園」研修、広島研修旅行、総合実習、3年間の学びの集大成である卒業論文発表とともに学びの積み重ねの中で立派に成長を遂げました。社会や平和と人権そして医療者の役割にもしっかりと目を向け、「自分が変わった。成長できた」と看護師として逞立っていく決意を語る一人ひとりの姿にとても感動しました。新たな環境で新しい一歩を着実に踏み出してほしいと心から願っています。

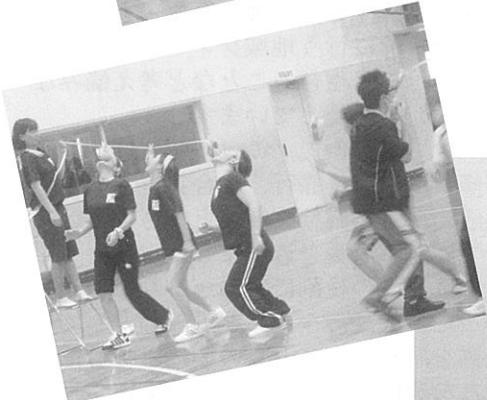
「この学校にはいのちに対する深い学びがあります。」この言葉の重みを心から実感した一年間でした。

写真で語る 学校行事 2014

体育祭

第20回 体育祭

「元気に有酸素運動～
熱く燃えあがれ看護の魂」



今年は「元気に有酸素運動～熱く燃えあがれ看護の魂～」をテーマに2014年6月27日に開催されました。

例年継続されている男女混合バレー、男子バレー、ドッヂボールの他に借り人競争にパン食い競争を合体させたパン食い・借り人競争をおこないました。なかなかパンが取れずに苦労した人もいたり楽しい競技になりました。

各学年、クラスで協力・応援し、また学年を超えた交流もあり、楽しく熱い1日となりました。



優勝は3年生。3年間の思いを存分に発揮できた1日でした。昨年に引き続き仮装をしたり、全体を盛り上げてくれました。1年生はクラスTシャツを作ったり、事前練習をしたり、準備万端で体育祭にのぞみました。担任の山本先生も男子バレーチームに入り、学生と一緒に汗を流しました。2年生は成人1実習後の疲労もありましたが、2年生らしいマイペースで準優勝。1年生と数点差での2位に驚きました。学校から離れ、大いに体を動かし、リフレッシュできた体育祭でした。来年度もみんなが安全に楽しく盛り上がる体育祭となるよう進めていきたいです。

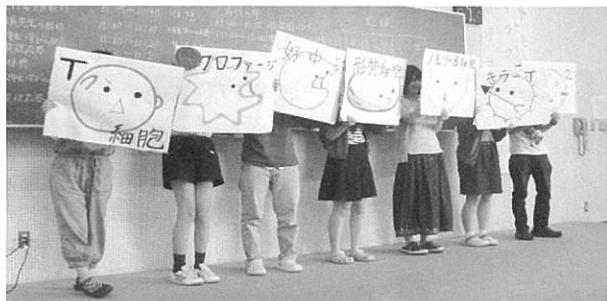
体育祭担当教員 青山陽子



東葛祭

第20回東葛祭

2014年9月26日・27日に東葛祭を行いました。今回のテーマは「広げよう東葛の輪～明日へ繋がる医療～」でした。私たちの学校では患者さんの立場に立つ看護師となれるよう、医療・看護の専門知識・技術はもちろん、患者さんを取り巻く社会保障・社会情勢について学んでいます。患者さんや地域の方々から学ぶことが、私たちが生きることに繋がります。地域の方々との繋がりの中で私たちは看護だけでなく社会を学ぶことができています。それを未来に繋げて行こうという思いを込めてこのテーマにしました。

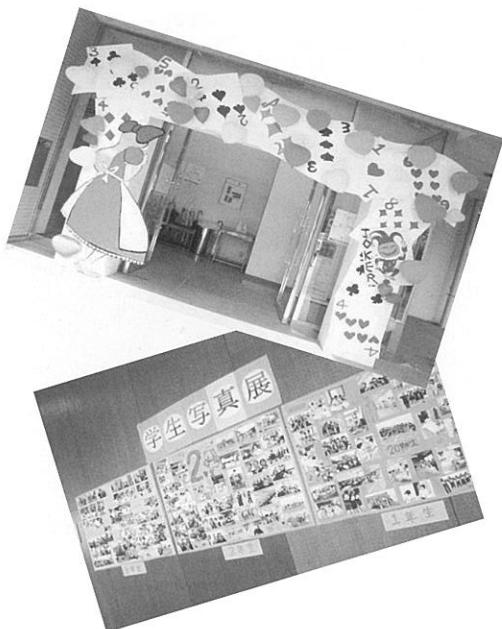


東葛祭1日目では、学びの共有として各学年・教職員による学びの発表を行いました。1年生は車いすウォッキングを通して普段私たちが何気なく通っている道は車いすを使用している人たちにとって便利なのか、人間として移動する権利は保障されているのかを伝えました。2年生は生命活動として田植えをし、稻刈りをして植物も人間もほとんど同じ遺伝子構造であり生命は対等・平等なのだと学びました。また一つが障害されても補う恒常性があり全身が繋がっていることを学びました。その代表として免疫グループの免疫機構についてわかりやすく劇で伝えました。3年生はハンセン病患者さんが社会から差別された歴史があり人権とは何かを学びました。ハンセン病市民学会や研修旅行の学びを通して、平和でないと人権は護られない事、医療はできないことを伝えました。教職員は広島の原爆投下を題材に平和と対極にある戦争の問題に向き合うという意味

を込めて「あの夏を忘れない」というお話を朗読し、原爆の怖さ、二度とそのようなことがあってはいけないと伝えました。また、代々木病院の合唱団バンブーの方々による楽しく素敵な合唱の発表もありました。午後は、イラク人道・医療活動をされている高遠菜穂子さんをお迎えし、「“対テロ戦争”とは何か～泥沼のイラクから学ぶ～」をテーマに講演をして頂きました。事前学習として観た映像、そして高遠さんのお話からイラクが現在置かれている状況、イスラム国がどんなことをしているかなどTVでは伝えられていないこと、高遠さんの講演会でなければ聞くことのできなかったお話を伺える機会となり、集団的自衛権の行使を容認した日本も安全とは言えない、もっと世界のことに目を向けて平和について、考え方を支援していく必要があると学ばせて頂きました。

東葛祭2日目は地域の方々にも楽しんで頂ける催し物を行いました。玄関前には今回のテーマの立て看板と不思議な国のアリスをモチーフにしたアーチの設置を始め、食事処、フリーマーケット、こども縁日、お化け屋敷、リラクゼーション、一般の方にも学んで頂けることとしてAEDの実演、各クラスの作品も展示した野田一民氏絵画展、小林功氏写真展、レモンカンパニーさんとの共同出店の平和ゼミナールによるカフェと活動報告を行いました。各学年で協力して自分たち自身も楽しく、多くの来場された方々にも楽しんで頂ける東葛祭となりました。ありがとうございました。

第20回東葛祭実行委員長 小野 明日香



原水爆禁止2014世界大会 in 広島 参加報告会の紹介

今年も、地域の方・病職員からのたくさんの応援カンパを受けて、平和ゼミナールの学生4名・教員1名が参加してきました。被爆者の生の話を記録した報告レポートを、1人でも多くの方へ伝えたく、全校集会で報告された資料から抜粋して紹介いたします。

分科会 青年の広場に参加して

20期生 遠藤鈴佳

Mさん男性80代

17才の時に学徒動員で授業がストップして工業で働いた。こんな毎日から抜け出したいと思っていた矢先に小学校の代用教員を募集していたので採用試験を受け無事合格しそこで働くことになった。

原爆の被害にあったのは8月6日8時15分爆心地から1.5km圏内の付近であった。

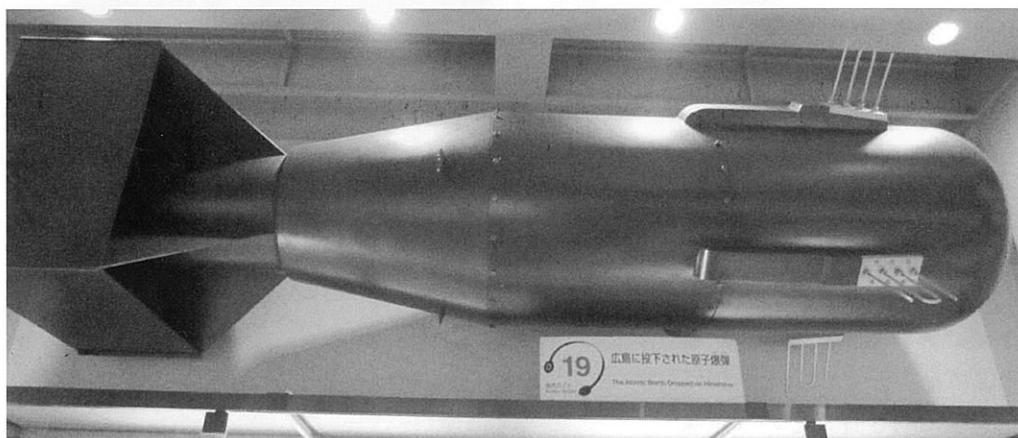
その日は仕事がお休みで学校とは反対の方向の電車に乗っていた。学校は爆心地から6km

駅で同級生に偶然会い話し込んでいた。そして8時15分強烈な光が見え敵から攻撃がきたら目と耳を覆うように教えられていたので真っ先に目と耳を覆った。と同時に爆風で体を持ち上げられ地面にたたきつけられた。それからしばらく気を失っていた。

目が覚めると真っ暗で音がない世界になっていた。耳は一時的に聞こえなくなったが慣れると聞こえるようになった。空を見るときの雲が空をおおっていた。

周りを見ると皮ふをぶら下げて歩いている人がたくさんいた。どうしたものか、自分は死んで地獄に来てしまったのだと思った。自分はどうなったのか体を触ると首のあたりなどは皮がむけてしまっていたが服をきちんと着ていた。友人はどうしたかと思って見わたすとすぐ側に悲惨な姿になって亡くなっていた。自分は友人の影に入り助かった。直接あの強烈な光を浴びなくて済んだということ。それからどうしても家に帰りたいと思い歩いた。～略～

Mさんは「平和の尊さ、戦争の悲惨さ、生きている命のありがたさ」伝えたいと私達のような広島を訪れる人達に自分の体験を話してくださっているそうです。



分科会

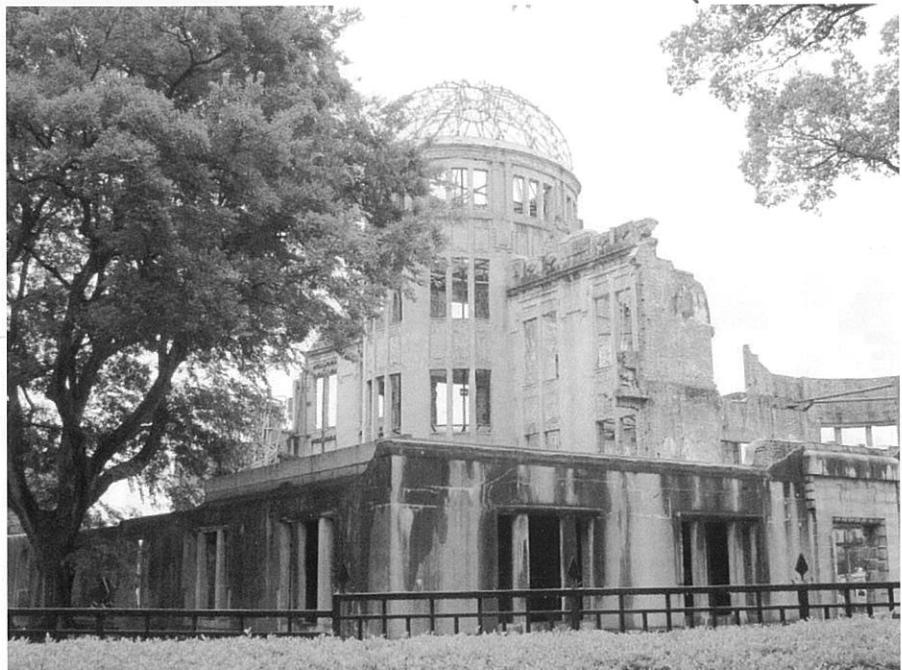
1年 真野 亮

分科会では中学一年生の時に被爆をされた80代のSさんのお話を聞きました。この方は学徒動員により工場でクレーンを動かしている時に被爆しました。ものすごい爆風でクレーンに叩き付けられましたが落ちなかつたので怪我は全くなかったようです。後に分かつたことですが、工場の中で作業していたため放射線から免れました。 略

自分の家がある街中には火がとても強く入れませんでした。焼かれて皮膚が垂れ下がる方が何人もいたそうです。後から分かつたことですが、その原因としては体の中の水が一瞬で1700°C以上になるため風船が破裂するように内側から皮膚を吹き飛ばし、指の先に垂れ下がる形になっていたそうです。 略

原爆ドームを見て、原爆の被害が特によくわかりました。そのままの形で残っているので当時は本当にこんな風景だったのだろうなと感じます。建物が全壊していたのがほとんどでしょうから、奇跡的に残った原爆ドームが後世まで伝えていける象徴だなと思います。そして今回最も印象に残ったのは資料館でした。原子爆弾の構造や遺留品などを見て、悲惨さを目の当たりにしました。中でも原爆投下後の状況を再現した人形や風景は恐怖すら感じました。ですが、被爆者の方からすれば現実はこんなものでは無いとおっしゃっ

ていました。この資料館を今年、安倍さんは改装するそうです。改装と言いますが、実際は原爆の悲惨さが最も伝わる人形と風景を撤去するということです。私たちに原爆の恐怖を学ばせないためです。着々と私たちをまた戦争に引き込もうとしているのがわかります。このことから自分たち国民は常に真実を知っていくことが大切だと感じました。そして国が間違った方向に進もうとしても、国民がダメなことにはとことん反対する姿勢を示すことが平和につながるのではないかと学びました。今回、原水禁に参加することで平和の大切さの学びが深まり、とても身になりました。行くことが出来て本当に良かったです。



学生と1年生 共に歩んだ一年

20期生

一同

担任

山本浩毅 江藤ちひろ

私たち20期生41人はこれから学校生活に希望と不安を胸に抱き入学しました。

入学してすぐの看護総論の交流研修。「地域の人々の生の声から人生・健康・医療について知り看護について考えていこう」というテーマで取り組みました。

地域の方々の話で印象に残った事は「実は流山にも戦争の影響があったこと、また千葉から東京へ行く道や橋などは黒焦げになった死体をかき分けて乗り越えて通って行った」こと。そして、「戦争という



地域の方に学ぶ

無駄な争いは絶対に嫌です。今の時代を大切に感謝しなさい」という話です。戦争の話をする時に重苦しい表情をされる方もいて辛い体験を話してくださったのはこれから看護師になる私たちだからこそだと思います。平和でなければ医療活動は行えません。戦争が起こってしまえば命、家族、仕事、当たり前の生活など多くのものを失います。健康を護る看護師だからこそ命・健康と平和を守っていくために「戦争とは」「平和とは」を考え続けていかなければなりません。また二度と戦争をしてほしくないという願いがあるからだと思いました。もっと戦争の事実を知り、二度と戦争を起こさないようにすることが必要だと思いました。

脊髄小脳変性症のA氏からも話を聞きました。車椅子で生活しコップや携帯電話を持つのが精一杯でした。以前訪問看護師へ電話したときに赤ちゃん言

葉で話され、とても腹が立ったそうです。「話し方はばかみたいに見えるかも知れないが普通の言葉で話してほしい」と訴えられていました。私たちに話を聞かせてくださる姿はとても明るく笑顔で、病気の人は暗いというイメージが変わりました。A氏の前向きに生きてこられた話に驚きや衝撃を受けました。A氏から勇気をいただき自分たちも困難なことがあっても前向きに励みたいと思いました。地域の方から聞いた話をその日にまとめて翌日グループ内で発表しました。きちんと話を聞いていたつもりでも聞き逃している部分があり個人の捉え方による解釈の違いがあったことを知りました。

6月に基礎1-1実習で初めて病院に行きました。実習前、患者さんは「弱くて守らなければいけない存在」で、すべてを支援するのが看護だと思っていました。しかし、受け持ったB氏は血糖値を自分で測り記録し、退院後もバランスのとれた食事を摂ることができるように写真を撮ってメニューを確認し、自ら健康を考え目標を持ち生活していました。家に介護を必要としている奥さんが、その介護をしたいという思いからリハビリにも一生懸命取り組んでいました。薬や時間の管理を自ら行っているB氏の姿を見て、すべてを支援することが看護ではないと知りました。そのことから「患者さんは弱く守られる存在ではない」と学びました。実習で患者さんを受け持ち実際に話してみると、話を聞きながらメモを取ると話を聞く事に集中できず患者さんの表情を見る事ができませんでした。逆に表情に注目するとメモを正確に取ることが出来ませんでした。そのため患者さんの言葉を自分の考えで勝手に解釈してしまうこともあります。患者さんのありのままを捉えることの難しさを実感しました。

基礎1-2実習では、患者さんの事実をありのままに捉えることに加え、事実から患者さんの願いや要求に応える看護実践を目標に実習に臨みました。受け持ったC氏は80代女性、過敏性腸症候群と診断され食欲不振で腹痛の精査のため入院していました。寝たきりで、食事は介助が必要で、排泄はオムツを使

用している状況で受け持つことになりました。C氏の「何をするにも人任せ。自分では何もできない」という発言から私たちはC氏に前向きになって欲しいと思いました。そしてC氏が腕を動かせるということに気付き食事が一人でできるのではないかと考えました。スプーンを持ちやすくするためにガーゼを巻いて太くして練習しました。また、頸が上がってしまっていたので枕を置いて頸をひける体勢を作ったり、食事が見えやすいように鏡を使ったりと工夫しました。C氏は実際に自分で食事ができるようになりました。C氏の「できた」という嬉しそうな声を聞くことができて嬉しかったです。その後、髪



決意文を読み上げる 20期生

をといしたり飲み物を飲んだりなど、C氏ができるよう働きかけました。そして実習4日目には、ずっと寝たきりだったC氏が座ることや車椅子に移乗すること、平行棒で歩くことができました。また、ポータブルトイレで排泄することもできるようになりました。5日目には「今日は自分で食事をする」という発言を聞くことができました。C氏の好きな音楽を流すと口ずさんでいて、散歩に行くと笑顔が見られました。C氏はできることが増えるにつれ、表情が明るくなりました。まさかたった5日間で寝たきりだったC氏の歩く姿まで見ることが出来るのは思いませんでした。C氏は食事が自立すると座ったり、歩いたりと次々に日常動作が出来るようになりました。実習前に聞いていた「寝たきり」という状態が全てではなく、患者さんの事実は何かと先入観を持たず、よく観察し患者さんの願いに基づいた実践が大切だと学びました。

これまでの授業や実習を通し、事実をありのままに捉えることはとても難しいことが分かりました。そして事実をありのままに捉えることが患者さんの願いを叶えることにつながることを学びました。今後も私たちは患者さんの願いを応援できる看護師を目指していきます。



ナーシングセレモニー

学生と2年生 共に歩んだ一年

19期生

一同

担任

青山陽子、高田澄子、生田知歩
徳丸美津子

2年生の学びは生命活動からスタートしました。

1. 健康な人間の「生命活動」をつくりなす身体のしくみと働きを「生命」誕生と進化の過程を踏まえて学び、「人間」を科学的に理解する。
2. 「生命活動」を8つの系に分け、それぞれの独自な働きと役割、またそれらの系全体のつながりによって生命活動が営まれるという一部分と全体の有機的関連をとらえる。
3. 人々が健康に生きるために基礎知識について「いつでも・どこでも・誰にでもやさしく、楽しく説明できる」力を身につける。
4. 課題テーマに沿って、グループメンバー全員が「分かった」という水準までの文献の理解及び調査研究を徹底する。

上記4つを目標とし、学習を進めて行きます。事前課題として「生命150億年の旅」(92新日本新書・湯浅精二著)を読み進化の過程、人類誕生、生命とは何かについて学びます。



生命活動ゼミ 呼吸器グループの発表

個体発生は系統発生を繰り返します。私たちが自分の身体、命を考えていく上では生命誕生を歴史的に見ていくことが重要になります。解剖・生理・生化学をつなげて生きて動く身体の理解へつなげます。生命の定義は物質代謝と自己再生産です。そしてそれは常に発展し続けていること、私たちの身体の巧みさ、素晴らしさを細胞レベルで考え、学んでいきました。また、1つの疑問をみんなで調べ理解することでわかる喜びや学ぶ楽しさを実感できる時

間もありました。

免疫グループでは初め、「身体を外敵から守ってくれるのはすべて免疫」と単純に認識しようしていました。しかし、詳しく見ていくと『免疫とは、病原体が侵入してきたら「自分」と「自分でないもの』を認識して記憶する。その異物がふたたび入ってきたら、特異的に防御するしくみ』で免疫細胞が連携プレーで私たちの身体を守っていることもわかつきました。



共に学び合う健康学習会

私たちの身体に細菌やウイルスが入ってきたとき、まず咳やくしゃみ・鼻水や鼻毛で「異物をいれるな!」とバリヤーがはたらきはじめます。突破した異物に対して今度はマクロファージ（異物を食べる細胞）などが働き始めます。マクロファージから抗原提示（異物が入ってきたと伝えること）があると、T細胞が活性化して、細胞性免疫と液性免疫が異物をやっつけるために働きはじめます。このように、食細胞・T細胞・B細胞など様々な細胞や物質が連携し合いながら免疫系は成り立っています。

成人1実習は生命活動の学びを土台に患者さんの病態を科学的にとらえる実践です。多発性骨髄腫の治療のため化学療法を受けているD氏。学生Aさんは受け持ち当初、骨髄腫だけで免疫能が低下すると思い込んでいました。治療を学んでいくうちにメルファランとプレドニンを使った化学療法でさらに免疫能が低下するということを知りました。易感染状態であったD氏。初めは易感染状態になると何がおこるのか、D氏がどれだけ易感染状態にあるのか、まったく整理がつきませんでした。



稲刈り

そこで、骨髄の解剖・生理から勉強し直しました。

骨髄から作られるのが血球とリンパ球で、リンパ球系細胞から作られるB細胞はヘルパーT細胞の指



免疫グループの劇

令によって形質細胞という免疫グロブリンを作る。この形質細胞が正常に分化されなくなり、免疫機能を持たないM蛋白が増えすることで、血球も作られなくなる。このことから白血球は減少し、易感染状態になるのです。化学療法後のD氏の白血球数は治療開始し10日後、約半分に減少しました。治療による副作用の影響の大きさを血液データから科学的に理解することができました。そして、「家に帰りたい」と願うD氏にとって大切なことは二次感染を起こさないことだと気づきました。そこから感染兆候はみられていないか、データや患者さんの症状など日々観察することは増えていきました。感染対策の為には環境整備の徹底。清潔ケア、特に上気道感染予防には口腔ケアが重要であることを学び実践しました。

それは「家に帰りたい」と願うD氏への科学的根拠に基づいた実践なのだと病態学習からつながりました。まさに生命活動の学びが実践と結びついた実習でした。

私たちの身体には簡単には病気にならない巧みさ、強さを持っています。そして、それは長年の月日をかけて獲得してきたものです。外界の刺激から身体を守り、内部環境を保つため、それぞれの器官や細胞たちが連携し合い私たちの健康は保たれています。患者さんの病態をとらえるには人間の生命活動をもとにして行われている治療を具体的に理解すること。その上で生活史を踏まえ患者さんの願い（・要求）を応援することが大切なのだと理解することができました。



収穫祭

生命活動学びの一環として、「田植え」「稻刈り」も行いました。私たちが生きるために酸素と栄養が絶対に必要です。人間は自然と共に進化・発展してきたことを体験的に学び、収穫祭では自然の恵みに感謝し、黒米と豚汁、ポテトサラダをみんなで作り美味しくいただきました。

2年次後半からほぼ4か月にわたる成人2実習・専門領域実習（外科、精神、母性、小児）です。領域の違いはありますが、そこでも基本となるのは「生命活動」です。科学的な視点で物事をとらえ、患者さんの願い（・要求）の実現に向け生命活動にもとづいた実践の根拠をこれからも追及し続けます。そして、病気と生活・労働環境とのつながり、社会のしくみへと視野を広げ学びを積み重ねていきます。



田植え「ホタル野の会」の皆さんと

学生と3年生 共に歩んだ一年

<ハンセン病市民学会に参加して>

2014年5月、1泊2日で「第10回ハンセン病市民学会総会 交流集会 in 群馬 草津～いのちの証を見極める～」に参加しました。国立ハンセン療養所である栗生楽泉園の見学や重監房資料館を訪れ、ハンセン病患者への人権を無視した差別の歴史について学び、政策的にハンセン病患者を強制隔離していくことについて考えました。戦争が広がっていくなか、強い日本にふさわしくないとハンセン病患者を家族のもとから引き離し、罪もない人を重監房という監禁施設にとどめるという人権無視の歴史がありました。人々の健康と平和を願う医療者が、正確な知識を広めるどころか、権力によって人権を踏みにじる医療を行った事実をはじめて知りました。この学校に入るまで、ハンセン病のことを知らないという学生も多く、事実を知ろうとしなければ知ることができないと学びました。これからも学び続ける姿勢を持ち、医療者として流されることなく正しい知識のもと、人権を一番に考えていく大切さを改めて学びました。



<研修旅行>

私たち18期生は、広島県・山口県3泊4日の行程で、8月27日～30日に戦争・基地問題の視点から平和と医療について学びを深めました。1日目は岩国基地沖合移設地を見学。岩国基地は私たちの税金でアメリカにいいように作られたもので、それにより地域の方々の生活が脅かされていました。

18期生

竹舎奈央、小林友里子、古川紀子、千明綾菜、
花岡あす実、片倉千代、児玉一記

担任

菊池静華、佐々木幸子
江島典子、徳丸美津子



2日目は元通信病院跡、平和記念公園を見学し、被爆体験講話を聞きました。言葉に詰まりながら戦争の体験を語り継いでいかなければならぬと、火の海、死体の山の光景を必死に思い出しながら語る被爆者の方に胸が詰まる思いがしました。

最終日には大久野島にある毒ガス資料館を見学。現地に行き、本には書かれていない隠された事実、生の声を聞き、戦争は想像していた以上に悲惨で、理不尽なものだということを改めて学び、そしてなによりも戦争はまだ終わっていないのだと実感しました。

この学びを通して、日本が誇れる平和憲法の意味や大切さを実感しています。私たちを守るこの憲法が、脅かされている今、これから看護師を目指していく私たちが戦争をしてはいけないと声を挙げていかなければならないと強く感じました。

<千葉県看護学生研究発表会>

平成26年11月14日に千葉県文化会館で行われた千葉県看護学生研究発表会に参加しました。

代表事例の在宅実習で受け持たせていただいたA氏は、電子機器などの設計をする事業を起こし、海外へ出張し、特許を何十個も取って活躍してきた方でした。2012年夏にALS（筋萎縮性側索硬化症）と診断され、この1～2年で症状は大きく進行し、移動も自由にできなくなり、食べたいものなど我慢することが増えていました。

しかし、A氏は今も仕事への誇りを持ち、常に構

想を膨らませていました。そしてメールを使い、図面を兵庫県の仲間に頼み、技術組み立てを山形県などと、仲間と協力しつつ実現を目指していました。A氏は仕事に対する望みをもって毎日懸命に生きています。そして医療者はそれを続けられるよう、体の拘縮を防ぐ足浴やマッサージ、関節可動域訓練



災害看護学 創傷メイク

を積極的に行い、進行ができるだけ抑えられるよう、さらに次の症状を予測して必要なケアを考えていくことが求められると学びました。

実習の最終日には「レストランで好きなステーキを皆と食べたい」と希望され、車いすで学生と出かけました。一口大に切られたステーキを食べるA氏は、これまでに見たことのないとびきりの笑顔でした。A氏から、病気で身体を動かすことが難しくなっても、その人の願いや意思を伝える手段は奪われてはならないのだと学びました。

私たちはその人が望む生活を支えていくチーム医療を実践できる医療者になりたいと思います。



県下看護学生研究発表会を終えて

<総合実習・社会保障ゼミ>

3年間の総決算である総合実習では、終末期の患者さんを受け持ち、また、「自宅に帰りたい」と願う患者さんを受け持つて応援しました。胃がんで食事もとれなくなった患者さんの故郷の「つみれ汁を食べたい」と言う願いを叶えるため、学生・病棟スタッフ総出でつみれ汁を作つて食べてもらいました。病状の進行が早く実習期間中に亡くなってしましましたが、最期に「O君と将棋ができた良かった」と言ってくださいました。なぜ初診で末期と診断されてしまったのか、実習でつかんだ医療者不足の問題など、患者さんを通して持った問題意識から社会保障の現実を研究し、国民全体の問題であるということを学びました。

この学校に入り、人権や憲法を学び、患者さんの健康を守るために、もっと社会に目を向けていかなければならぬということがわかりました。社会保障や憲法が改悪されているという問題を、声に出して訴えていくことが大切だと皆心に刻みました。病気と必死に闘っている患者さんと共に、病態を捉える科学的な看護、生活と労働の生活史に沿つて患者さんの願いを応援する看護の実践を、これからもし続ける看護師になりたいと誓いました。



卒論ゼミナール

ともに学びあう健康学習会

夏の教員研修会

「全日本民医連看護学校学術交流会」を開催して

勤医会東葛看護専門学校 副校長 山田 かおる

全国には民医連立の看護学校が8校あります。今年の夏、民医連立看護専門学校7校の教職員84名が参加し、第1回全日本民医連看護学校学術交流会を開催しました。社会保障破壊が進み、国民の命と健康が脅かされている今、国民の基本的人権擁護の立場に立てる看護師養成に携わっている者が、連帯とともに学びあう場という趣旨で、2年がかりの準備で開催をいたしました。



1日目は2演題の講演で学びました。1演題めは、奈良少年刑務所で社会性涵養プログラムに携わっている作家寮美千子先生による、『詩が開いた心の扉～空が青いから白を選んだのです 奈良少年刑務所詩集～』の講演でした。少年刑務所の受刑者は、幼少時からの貧困・虐待・薬物などで、生きるために犯罪をするしかない状況であったこと、そのため自己肯定感が著しく低いこと。しかし詩の制作をとおして自己表現をし、その作品を仲間と学ぶプログラム

をとおして、どの人も自己を解放し他者を認め、人間として成長していく。認め・受けとめていくことの大切さ、人間は人間との関わりの中で育ち、無限の可能性があることを学びました。

次は、北海道勤医協理事長の堀毛清史先生による『健康権を高く掲げて～民医連の看護への期待～』の講演でした。先生が、患者さんや家族の要求をつかみ離さず、その実現の為に生活の場・家族状況・仕事内容・勤務形態まで具体的にとらえて実践してきた報告でした。また学校検診から見えた子どもたちの貧困の実態に対しても、生徒たちに直接語りかける取り組みなど、「健康権を高く掲げた」実践に感銘を受けました。

2日目は会場を勤医協札幌看護専門学校へ移し、全国から寄せられた「51演題」の教育実践レポートを、5分科会に分かれて発表し討議しました。人権・平和の教育実践、授業や臨地実習の教授内容や教育方法、国家試験への取り組み、学校運営に関するなどを発表し合いました。他校の取り組み内容を聞いて、発表し学びあいました。さらに教育内容は違えども、学生の為に良い教育をしたいと奮闘している全国の仲間に会えたことは、大きな励みとなりました。「厳しい医療・介護、そして教育情勢ですが、こんなにも多くの仲間が全国で奮闘しています。是非、また集まりましょう！」と2日間を締めくくり、北海道を後にしました。



ようこそ先輩

1科9期生の川村満です。私は看護師9年になり、学生の臨床実習指導者をさせていただいています。以前の自分には想像もできなかつたことですが、今は学生と一緒に学んだり時には指導したり、学生が実習しやすい雰囲気をつくることは大変ですがとても充実した日々を過ごせています。

年々入院日数の短縮化や医療改悪がすすんでいて、日々の業務に追われ十分な看護をする時間がなくなってきたと感じます。少ない時間の中でも患者さんのためにできることは何かと、看護学校で学んだ「人間の権利とは?」を模索し、日々変化し続ける医療制度にも関心を持ちながら頑張つていこうと思います。



1科9期生 川村 満

東葛病院4階東病棟で働いている、2科9期生の佐藤千賀子です。縁あって臨床指導者という形で、学生さんと関わらせていただいています。

私の職場は大好きな患者さんの誕生日や外出などイベントを大切にする。忙しい中でも患者さんとまっすぐに向き合い患者さん的一番近くで辛さや喜びを共感できる、そんな仲間と一緒に働く今を誇りに思います。これからも初心を忘れず、自分自身もそんな看護師であり続けたいです。そして実習という短い期間の中で、少しでも学生さんに看護の楽しさを伝えていけるようになりたいなと思っています。



2科9期生 佐藤千賀子

学生自治会紹介

こんにちは。第17期学生自治会です。昨年9月に役員選挙を行いました。新しいメンバーも加わり仲良く活動しています。学生自治会は、学生ひとりひとりが主人公となり、主体的に学びを深めていくような学校を目指して活動しています。今後は全校生徒を対象としたアンケートの実施や国試激励会、新入生歓迎会などを予定しています。また、自治会とクラス四役が協力し、意見を交換する場を設けることで更に全校生徒が有意義に学生生活を送れるようにしていくらうと思います。学生自治会は、学生がより良い生活を送れるように未熟な部分はありますが精一杯力を合わせ頑張っていきたいと思います。



書記2年 濱平 史生
1年 大森 友貴
会計1年 針ヶ谷 理恵
副会長2年 大和久 那未
会計監査1年 小林 美貴
2年 小林 海仁
2年 米山 朋子
副会長1年 遠藤 鈴佳
会長2年 平野 舞

編集後記

江戸川の土手はまだ冬の景色ですが、川辺を歩くとなのはなが春を迎える準備をしています。卒業と入学の春がすぐそこまで来ています。

この春看護師として卒立つ3年生の学びは、何と言っても急遽追悼の会となった栗生楽泉園での『ハンセン病市民学会』での学びでした。御雄二氏は、国策による差別と強制隔離の苦しみを国の過ちとして問い、闘い続けた生涯でした。国そして医療者の大きな過ちを、二度と繰り返してはならないと学生は学び、人権が保障される社会を創っていきたいと決意しました。13年間栗生楽泉園で御さんをはじめとする皆さんから学んだ、命を懸けた『人権の護る闘い』を私たちは受け継ぎ、開校20年の歴史を学生とともにさらに発展させていきたいと思います。

なのはな編集委員 山田かおり
菊池 静華

キラリ

学ぶ青春

20回入学式
勤医会看護専門学校



'14.3~'15.2
小林功
モノクロ写真館



MEMO